

学生大使 実施報告書

氏名：後藤早希

学部・学科（コース）・学年：医学部・看護学科・1年

派遣先大学：ガジヤマダ大学

派遣期間：2023/8/29～2023/9/13

1 日本語教室での活動内容

1日10:00～11:30、13:30～15:00の2回の授業を行った。日本語教室に参加してくれた学生は30人程で、1～3人の授業を担当した。少人数での授業が行えたため、それぞれのレベルに合わせた授業をすることができた。初級では、50音表のボードで書き順を示し、書いてもらったり、私に続いて発音してもらったりした。あ行を覚えたら、作ることができる言葉を紹介した。学生の理解力が高く、1回の授業で、ら行まで進むことができ、非常に驚いた。また、日常生活での挨拶、自己紹介を教えた。中級では、物の数え方、形容詞、建物名、時制、文法を教えた。上級では、数人を集め、かるたを行った。かるたをしたが、もっと知りたいという意欲を感じたので、もっと負荷のある授業の準備が不足していたと感じた。最後の日本語の授業に習字道具を持っていった。自分の名前や覚えた言葉、知っている漢字などみんなが思いのままに書に親しむことができた。手本を書いてほしいという依頼を受け、筆を持った時、みんなが私の手元に注目していて、緊張した。書いた半紙を持って、写真を撮り、嬉しそうにしている姿を見られた。日本の文化に触れるという点で持参して良かったと思った。

2 日本語教室以外での交流活動

私は、チューターの方が持ってきてくださったヒジャブを着て、お返しに持参した浴衣の着付けをした。ヒジャブを身に着けたままマリオボロ通りを歩いたときは恥ずかしかったが、貴重な経験になった。食事の際には、ヒジャブをまち針で留めていて、いつも通りに口を開けて食べるができなかったが、現地の学生は何でそんなにゆっくり食べているのか不思議そうに見ていて、面白かった。私がヒジャブを買いたいことを覚えてくれた現地の友達が帰国する前にヒジャブをプレゼントしてくれてとても嬉しかった。休日は海に行き、キャンプをした。みんなで波の音を聞きながら、マットに寝転んで、満天の星を見たり、日本の歌を流して、歌ったり、ご飯を作ったりと素敵な時間を過ごすことができた。日本語教室が終わった後は、ショッピングモールに行き、買い物やカラオケ、プリクラに行き、現地の学生と有意義な時間を過ごせた。コンビニに連れてってもらったときに、売られている飲み物はすべて甘いことに驚いた。徐々に辛さに慣れて、辛い料理と甘い紅茶の組み合わせをととても気に入り、好んで食べていた。

3 参加目標への達成度と努力した内容

私は、派遣前に2つの目標を掲げた。1つ目は、相手のレベルに合わせた授業をすることであった。達成度は70%である。相手が何を学びたいのかを把握し、それぞれの学生に合わせた授業ができたと思う。日本語の授業ではホワイトボードや多色のペンを使い、授業をした。イラストを描いて説明すると理解しやすいようであった。日本語のニュアンスを伝えるのはとても難しかった。2つ目の積極的にコミュニ

ケーションをとることは80%達成できたと思う。最初は初対面の人に声をかけるのに躊躇していたけれど、話しかけてみると、とても親しみやすい方が多く、自分から関わりを持てたことに成長を感じた。うまく英語で伝えることができないことに苦戦することもあったが、伝えたいことを読み取ろうとしてくれたため話しやすかった。また、日本語クラスで出会った学生に医学部に行きたいと勇気を出して話をしてみたら、連れてってあげるよと気さくに受け入れてくれた。それまでは、13人が少人数のグループに分かれて行動することが多く、自分で現地の学生と連絡を取り、行動することは緊張したが、医学部の雰囲気を感じ、さらに勉学に励みたいという意欲を高めることができた。

4 プログラムに参加した感想

このプログラムに参加して、水の価格に衝撃を受けた。そもそも日本では、水道の蛇口をひねれば、飲み水が出てくるので、水を買う習慣がなかった。インドネシアで500mlのペットボトルの水を購入した際は、50円程であった。経由地であるシンガポールのチャンギ空港では300円であり、躊躇した。価格の差から海外に来ているのだという実感を持った。また、お金の面では、コインよりもお札でのやり取りがメインであった。ルピアは桁数多いため、最初は戸惑い、もたついていた。終盤の方ではお金の感覚に慣れて、大学構内のカフェテリアで昼食やドリンクを注文して、会計まで済ませることができるようになっていた。

気になったことや疑問に思ったことはすぐ質問したけれど、現地の方は私が理解できるように教えてくれて、吸収できたことがたくさんあった。宗教や文化について、現地で初めて知ったことも多かった。このプログラムの価値は、一緒に食事をしたり、会話をしたり、関わりを持つことで繋がりを大切にできることだと思う。手と手を取り合って、日本語の輪を広めていくように感じた。心が温かく、学習意欲の高い現地の学生、学部は違うけれど今回のプログラムで親交を深めた山形大学のみんなとの素敵な出会いに感謝したい。世界に友達を作りたいという夢を叶える一歩を踏み出すことができた。

5 今回の経験を踏まえた今後の展望

今回のプログラムに参加して、実際に行かないと分からないことはたくさんあった。行ったからこそ学び得たことを周りの人に伝えたい。その一方で、自分の足りないところを見つけるよい機会になった。特に、日本についての知識不足を痛感した。経済、政治、宗教、文化など、日本はどのような国であり、何を目指しているのか、改めて学ぼうと思う。そして、他国を訪れ、五感をフルに使い、いろんな経験をした。表面上の楽しいだけではなく、違う視点を持ちながら現地で過ごせたら、さらに深みのある楽しみが持てると思うので、事前に現地の知識を身に着けたい。日本にいるときは留学生のサポートや大学・地域で行われている国際交流に参加したいと考えている。限られた大学生活の中でやりたいことを見つけたときには挑戦していこうと思う。



インドネシア料理



日本語教室



みんなで書道